

割り込み場面に関する言語行動意識

——異文化社会での滞在期間を視点とした分析——

石 井 恵 理 子

0 はじめに

人々の移動が地球規模で行われるようになった現在、日本語を母語とする人々と異なる言語を母語とする人々とは直接接する機会は、一部の人々のものから日常のあらゆる場面におけるあらゆる層の人同士へと、質的にも量的にも拡大している。直接接の拡大は、異文化同士の相互理解を促進すると同時に、摩擦や相互誤解（西原ほか1994）の要因ともなる。

本稿は、こうした直接接の時代にますます増大していく異文化コミュニケーションを取り上げる。異文化体験によって触発されて起こる、個人の内面における自分の出身社会の言語行動規範に関する意識化、および滞在社会の言語行動規範に関する意識化の双方を社会言語学的視点から明らかにすることを目的とした言語行動意識に関する調査研究から、一つの接場面言語行動について考察する。

1 研究の目的

1.1 取り上げた言語行動場面

直接接による摩擦が起こりうる場面として、本稿では役所の窓口における割り込み依頼の場面における言語行動を取り上げる。文化という概念には社会文化行動（実質行動）と社会言語行動が含まれる（ネウストプニー 1995）が、割り込み場面には、並ぶ、割り込むといった社会文化行動と、割り込ませてもらうための依頼や交渉、断り等の社会言語行動の両側面が関係する。また、割り込みという行為が関係する人々の実質的利益に結びつくため、それぞれの行動についてお互いの規範意識に照らした評価が厳しくなされ、言語行動および言語行動規範についての意識をつかみやすい場面であると考えられる。

1.2 言語行動意識に関する調査研究

複数の言語文化社会における言語行動の比較対照研究は、異文化間コミュニケーションや対照語用論の分野で、収集した談話の分析、コミュニケーション行動の観察などによる研究が数多くなされてきた。それらの多くが発話行為やコミュニケーション行動そ

のものを比較対照する研究であるのに対して、「ビデオ刺激による言語行動意識調査」(注1)は、異文化社会での接触経験を持つ被調査者の意識を調べ、それによって日本と他の言語文化社会における言語行動規範を探ろうとする研究である。それぞれの社会文化のありようや違いは測定できるものでも客観的に規定できるものではなく、個人が知覚するものがその個人にとっての現実である (Acton 1979)。二つの社会を見る個人の言語行動に関する意識は、複数の社会文化における言語行動規範を探る重要な視点である。同言語行動意識調査については分析編・資料編の2冊からなる報告書 (西原ほか 1999) に、調査全体の詳細と、調査結果について出身国・現住国による国別グループを中心的な視点とした分析によって得られた知見がまとめられている。

本稿で取り上げる割り込み場面についての出身国・滞在国別分析からは、特に韓国・ベトナムのアジア2国とフランス・アメリカの欧米2国に対する日本人の意識の差と、日本人とアジア2国を母国とする人との双方の国に対する意識の大きなずれが浮き彫りになった (石井 1999)。こうした認識のずれは、社会の人間関係のあり方に関する価値観の違い、つまり基本ルールに従い相手の権利を侵さないことで良好な人間関係を保つ欧米型社会と、基本ルールを破ってまで相手の事情を汲んで便宜を図る態度によって人間関係を保つアジア型社会の基本的なあり方の違いに起因する。その違いを理解せずに、欧米型の枠組みで日本人がそれぞれの言語行動を解釈したことがずれを生んだ。異文化接触場面での言語行動の認識に、自分の出身地の社会文化がどのような枠組みをもっているかということが大きな要因として関わることが確認された。

新しい文化の理解は、新しい文化と出身社会文化の両方の客体化の過程を経て進んでいくものであり、異文化との接触経験によって促進される (Acton 1979) という考えに従えば、出身社会の文化の枠組みによる異文化の認識は固定的ではなく、異文化社会での経験によって変容しうる。文化習得についての Acton (1979) と Brown (1980) のモデルをもとに、内海 (1990) は4つの文化習得段階に内的社会距離の特徴を加えたモデルを示した。自文化をより近く、異文化をより遠くに感じる (第1段階)、第1段階よりさらに自文化を近く、異文化を遠く感じ、自文化と異文化の距離も大きく感じる (第2段階)、自分が二つの文化から非常に離れていると感じ、相対的に自文と異文化を非常に近く位置付ける (第3段階)、自文化と異文化と自己の3つの距離をほぼ等しく感じる (第4段階) という4つの段階が内海のモデルである。本稿で扱う調査データにおいても、滞在期間による出身社会と滞在社会の言語行動に関する意識にそのような変容が見られるであろうか。またどの程度の滞在年数で各段階の特徴があらわれるであろうか。現住国での滞在年数を視点としてデータの再分析を行い、出身国・現住国それぞれについての言語行動および規範についての意識の変化を見ていく。

3 調査概要

3.1 調査方法

調査は、日本と比較対照する言語文化社会としてブラジル、アメリカ、フランス、韓国、ベトナムの5カ国（以下、「対照国」とする）を選び、各地に生活する日本語母語話者（以下「日本人」とする）と、反対にそれら5カ国から渡りし日本で生活している日本語非母語話者（以下「外国人」とする）を被調査者として行い、それぞれの言語社会における言語行動意識を面接によって聞き出した（注2）。ある接触場面における言語行動について、現住国の社会での一般的な言語行動および言語行動規範についてどのように理解しているか、出身国の社会での一般的な言語行動および言語行動規範についてどのように理解しているか、さらに、自分自身は現住国でどのような言語行動をとっていると考えているか、出身国ではどのような言語行動をとっていると考えているか、という4つの側面について聞き取りを行った。

取り上げる言語行動場面について回答を得る際、ビデオに録画された短い映像を刺激として提示した。これは調査者の想定する場面と被調査者がイメージする場面とのずれを最小限にとどめるためである。また、ビデオ映像を用いることで言葉による描写よりはるかに大量の情報が提供できること、その場面の映像および音声情報の何に注目して情報を得るかなどの情報を被調査者から引き出すことができるという利点もある。

質問は調査票に沿って行った。被調査者は各質問ごとの選択肢リスト（外国人被調査者用のものは母語の翻訳を併記した）を参照し、口頭で回答した。

調査は、1995年2月～1998年8月に、日本および5つの対照国において実施した。

3.2 対象とする接触場面の概要

調査で示した割り込み場面の刺激ビデオ映像の概要は、次のとおりである。

窓口でパスポートを紛失して再発行を依頼しに来た男性と窓口係の女性とがやりとりしている。そこへ別の男性が来て、急いでいるので書類だけ受け付けてもらえないかと言って横から書類を出す。それに対して窓口の係の女性は順番だから待つようにと割り込みを断るが、先に来ていた男性は相手の書類を窓口係に渡し、「どうぞ」と順番を譲る。

3.3 被調査者

3.3.1 被調査者数

割り込み場面の調査は、日本人275人（在外日本人211人、国内日本人64人（注3））、外国人167人、合計442名の被調査者から回答を得た。

被調査者の出身国・現住国および男女の内訳は表1のとおりである。表中の4字のA

(19)

ルファベットは国別の集団を表す。BR（ブラジル）、FR（フランス）、US（アメリカ）、KR（韓国）、VN（ベトナム）、JP（日本）で、4字のうちはじめの2字が現住国を、後ろの2字が出身国を表す。たとえばBRJPは在伯日本人、JPBRは在日ブラジル人である。

表1 被調査者数

	全体	在外日本人						国内日本人	在日外国人					
		BRJP	FRJP	USJP	KRJP	VNJP	合計		JPJP	JPBR	JPFR	JPUS	JPKR	JPVN
男性	207	14	14	9	24	26	85	28	19	14	23	14	24	94
女性	235	18	29	23	33	23	126	36	12	17	15	19	10	73
合計	442	32	41	32	57	49	211	64	31	31	38	33	34	167

3.3.2 年齢

被調査者は18歳以上、年齢構成は表2のとおりである。

表2 年齢構成

(単位：人)

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代
全 体	5	160	137	80	37	16	5
在外日本人	1	51	74	49	22	11	3
国内日本人	2	20	13	12	10	5	2
在日外国人	2	89	50	21	5	0	0

3.3.3 現地での滞在年数

在外日本人および在日外国人の被調査者は、現住国での滞在が3ヶ月以上の者とした。

表3 現住国での滞在年数の構成

(単位：人)

	1年未満 ($L < 1$)	1年以上3年未満 ($1 \leq L < 3$)	3年以上5年未満 ($3 \leq L < 5$)	5年以上10年未満 ($5 \leq L < 10$)	10年以上 ($10 \leq L$)	不明
在外日本人	43(20.4%)	64(30.3%)	29(13.7%)	33(15.6%)	38(18.0%)	4(1.9%)
在日外国人	18(10.8%)	56(33.5%)	34(20.4%)	35(21.0%)	19(11.4%)	5(3.0%)

3.4 分析対照項目

調査では、ビデオ場面に登場する「割り込む人」「窓口の係」「割り込まれた人」それぞれの言語行動についての質問と、ビデオ場面から離れて日本と対照国における一般的な順番の後先に関する質問をした。本稿では、このうち「割り込む人」および「割り込

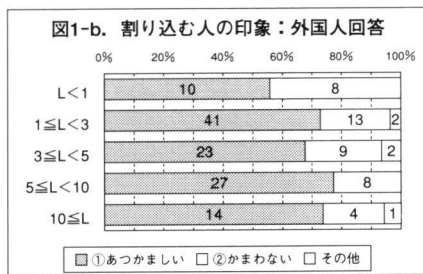
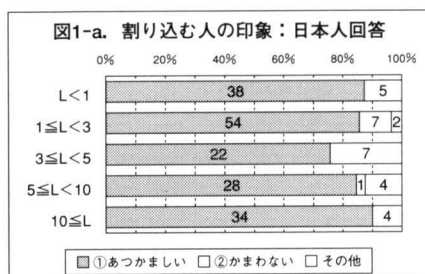
まれる人」に関する主な質問項目について、滞在年数を視点に分析する。

4 分析結果

4.1 割り込む人に関する意識

4.1.1 割り込みについての意識

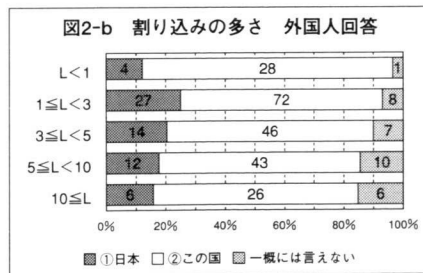
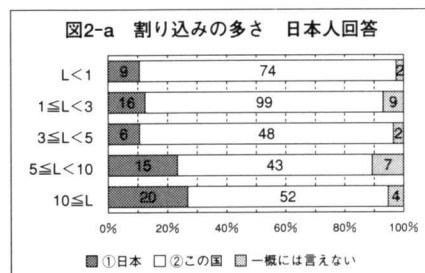
窓口係と先客がやりとりをしている横から「急いでるんですけど、書類だけ受け付けてもらえませんか」と書類を差し出す男性の割り込み依頼発話までのビデオ映像を示した後で、割り込みをした人についてどんな印象を持ったかを尋ねた。①「横から入ってきてあつかましい」と②「急いでることだし、受け付けるだけなら横から入ってもかまわない」の2つの選択肢を示し、回答を得た。(図1-a,b)



結果は、①「あつかましい」が全体で353人（日本人234、外国人119）に対して②「かまわない」が77人（日本人34、外国人43）と、①が圧倒的に多数である。外国人回答は日本人回答より①の割合がやや低いが、割り込みについては日本人・外国人ともにあつかましいという否定的な見方をしているということができる。

4.1.2 日本と対照国での割り込み行動に関する比較

日本と対照国では、番号札などのない状況においてビデオ場面のような割り込み行為はどちらが多そうか、という質問についての回答結果が図2-a,bである。



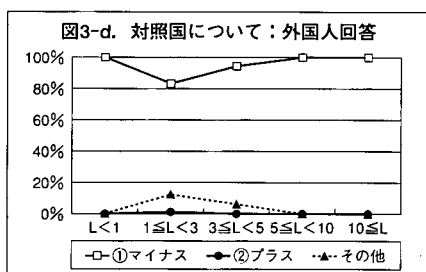
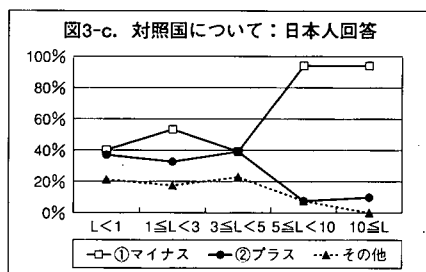
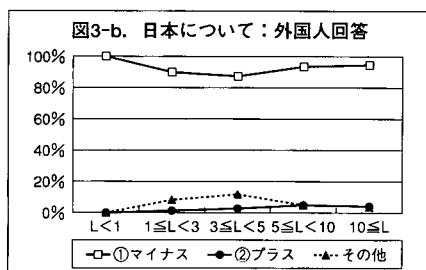
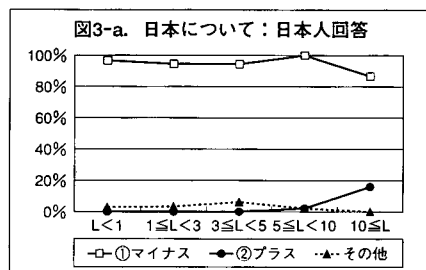
日本人・外国人ともに対照国のほうが日本より割り込みが多いと答えている。滞在年数別では、日本人は滞在年数が長くなるほど日本が多いという回答が増加する。外国人

は滞在1年以上3年未満で「日本が多い」と言う回答が最も多く、滞在年数が長くなるに連れ「日本」という回答は減少し「一概には言えない」という回答の割合が増える。つまり、日本人・外国人とも、長期滞在者ほど「現住国が多い」という回答が減る。

4.1.3 割り込み行動に関する社会的評価

次に、割り込む人に対して日本と対照国のそれぞれの社会では一般的にどのような評価をされると思うかという質問である。次の2つを選択肢とした。

- ① 入り込む人はマイナスに評価される。例えば、「礼儀知らず」「あつかましい」など
 - ② 入り込む人はプラスに評価される。例えば、「要領がいい」「世慣れている」など
- 滞在年数ごとに各回答の回答全体に占める割合を示したものが次の図3-a～dである。



日本についてはマイナスに評価されるという回答で一致するが、対照国についての見方は日本人と外国人とで大きく異なる。外国人回答は対照国（つまり、自分の出身国）についても割り込みはマイナスに評価されると回答しているが、日本人は滞在年数によって回答が分かれる。滞在年数が5年を越える層では対照国でもマイナスに評価されると見ているが、5年未満ではプラスという回答がマイナスと同程度ある（図3-c）。

4.1.4 自分自身の行動

ビデオ場面と同様の状況で、出身国と現住国それぞれにおいて自分がどのように行動すると思うかという質問の回答が図4-a～dである。

図4-a. 自分の行動 日本で：日本人

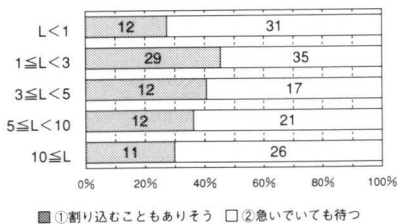


図4-b. 自分の行動 日本で：外国人

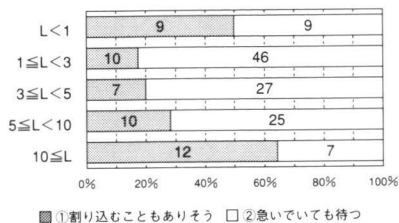


図4-c. 自分の行動 対照国で：日本人

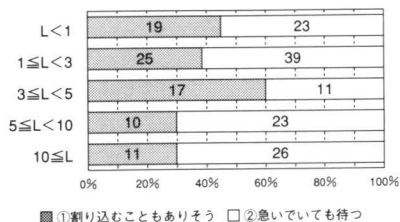
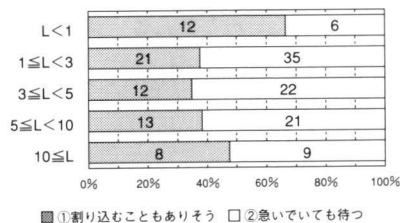


図4-d. 自分の行動 対照国で：外国人



日本人は、滞在年数の浅いグループで日本と対照国での回答に違いが大きく、10年以上の長期滞在者は両国で変化がない。外国人は10年以上の長期滞在者のみ日本で割り込むことがありそうという回答が増えるが、他のグループでは日本では急いでいても待つという回答が増える。特に、滞在1年以上から10年未満までは待つと言う回答の割合が70～80%にのぼる（図4-b）。

4.2 割り込まれた人に関する意識

割り込まれた人についての質問は、ビデオ刺激映像を見る前に予測してもらう質問と、割り込まれた人の対応を映像で見た後、その印象についての質問との2段階で質問した。

4.2.1 割り込まれた人の対応に関する予測

割り込まれる側はどのような対応をすると思うか、ビデオ場面での割り込まれた男性の対応を見る前に、日本と対照国それぞれについて予測してもらった。（図5-a～d）

- ① 「私が先です」と言葉に出して抗議する。
- ② 言葉には出さないが、迷惑そうな態度や表情を見せる。
- ③ 係の女性の対応を見ていて、入り込みを許すなら抗議する。
- ④ 係の女性が入り込みを許しても、仕方ないと思って、しばらく待つ。

⑤ 「どうぞお先に」といって、順番を譲る。

⑥ その他

図5-a. 割り込まれた人の対応 日本で:日本人

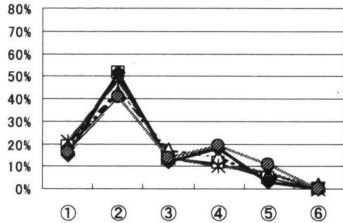


図5-b. 割り込まれた人の対応 日本で:外国人

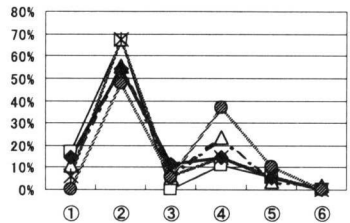


図5-c. 割り込まれた人の態度 対照国で:日本人

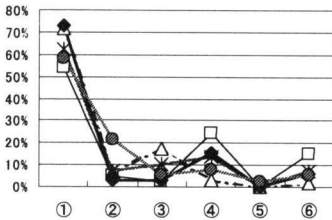
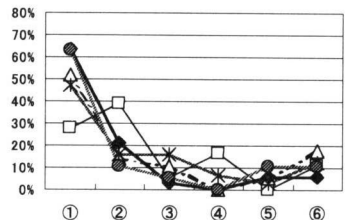


図5-d. 割り込まれた人の態度 対照国で:外国人



割り込まれた人の態度については、日本では言葉では抗議せず、表情や態度で気持ちを示し、対照国では言葉で抗議すだろうという予想が日本人・外国人ともに最も多い。回答パターンは滞在年数の長短に関わらず概ね共通であるが、外国人の滞在1年未満のグループのみ、対照国について①より②が多く、④も比較的高いという日本型の回答となっている(図5-d)。

4.2.2 割り込みに対する自分自身の対応<ビデオ視聴前>

自分自身が最初の男性の立場であつたらどのような態度を取るか、日本と対照国とでの自分の行動について、やはりビデオ映像を見る前に、割り込まれた側の態度についての質問と同じ6つの選択肢を示して質問した。回答は図6-a~dのとおりである。

図6-a. 自分の対応 日本で:日本人回答

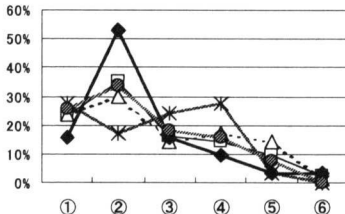


図6-b. 自分の対応 日本で:外国人回答

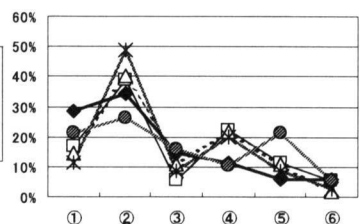


図6-c. 自分の対応 対照国で:日本人回答

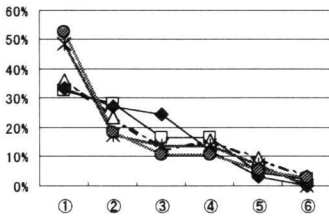
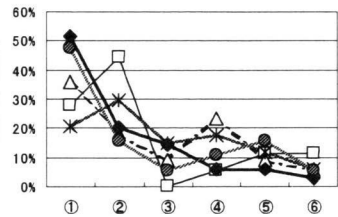


図6-d. 自分の対応 対照国で:外国人回答



日本では表情や態度で示し、対照国では言葉で抗議するという日本型・対照国型と呼べそうな意識が自分自身の対応についても一応見られる。しかし、ビデオ場面の対応の予測についての回答ほど滞在年数別グループごとの回答パターンは均質ではない。

ビデオ場面についての回答では、日本型・対照国型パターンと異なっていたのは外国人・滞在1年未満のグループの対照国についての回答のみであったが、自分についての回答でもこのグループは同様の回答である。それに加えて日本人・3年以上5年未満と外国人・3年以上5年未満の2つのグループが、それぞれ自分の母国での対応について、母国について予測した対応（図5-a,d）と異なり、むしろ現住国の人の対応予測の回答パターンに似た回答傾向を示している（図6-a,d）点が注目される。

4.2.3 割り込まれて譲る人についての印象

次は、ビデオ映像を見た後での質問である。割り込み依頼に対して窓口の係は断るが、割り込まれた男性が相手の書類をとって窓口の女性に出し「どうぞ」と譲る。そのように譲る人についての印象を尋ねた（図7-a,b）。選択肢は以下の5つである。

- ① 親切な人だという感じで、好感が持てた。
- ② 遠慮しすぎて、お人好しだと感じた。
- ③ 窓口の女性が判断すればよいことで、おせっかいだと感じた。
- ④ ありそうもないことで、理解しにくかった。
- ⑤ その他

図7-a. 譲る人の印象:日本人回答

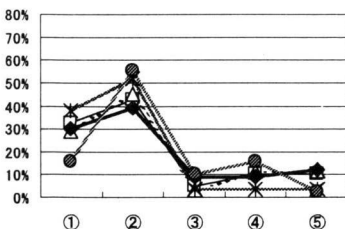
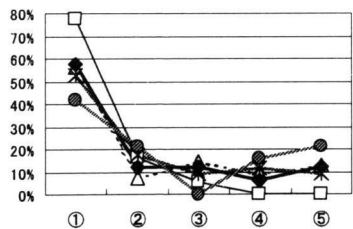


図7-b. 譲る人の印象:外国人回答



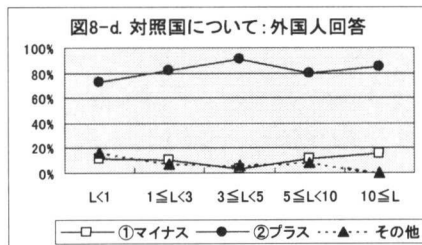
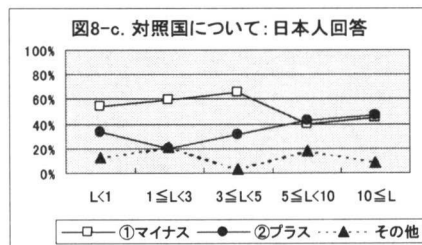
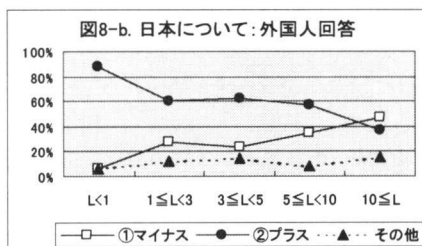
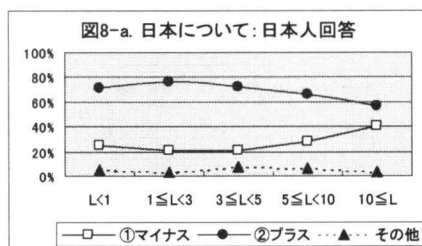
譲る人に対して、外国人は圧倒的に「親切だ」と回答しているのに対し、日本人は

「遠慮しすぎでお人好し」という回答が「親切だ」を上回る。外国人の各回答の割合を滞在年数グループごとに比較すると、最も①「親切だ」の割合が高いのは滞在1年未満のグループで、10年以上のグループは①が最も低く②が最も高い。一方日本人では、滞在10年以上のグループが最も①「親切」の割合が低く②「遠慮しすぎ」が高い。

4.2.3 割り込まれて譲る人に関する社会的評価

ビデオ場面のように割り込まれて「どうぞ」と譲る人は、日本と対照国それぞれの社会でどのように評価されると思うかという問いについて、下の2つの選択肢を示して尋ねた。結果は図8a～dである。

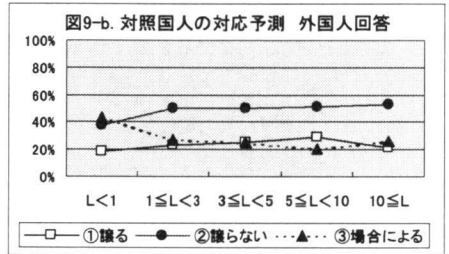
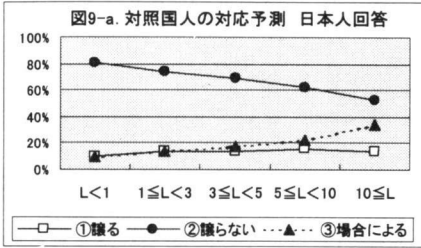
- ① マイナスに評価される。たとえば、「気が弱い」「遠慮しすぎ」「社会的に弱い」など
 ② プラスに評価される。例えば、「親切だ」「思いやりがある」など



出身国の社会についての回答（図8-a、d）は、どの滞在年数でも譲る人はプラスに評価されるという回答がマイナスに評価されるという回答を上回っているが、現住国についての回答（図8-b、c）は滞在年数の長短によってマイナスとプラスが逆転する。また、現住国である対照国に対する日本人の回答で、プラスに評価されるという答えの割合が低く、特に滞在年数の浅い被調査者は50%以上がマイナス評価と回答している点が他と異なる。

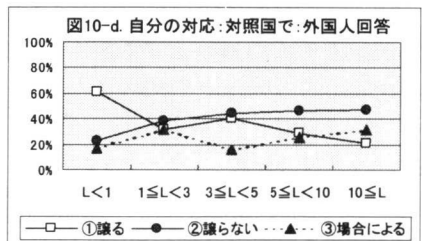
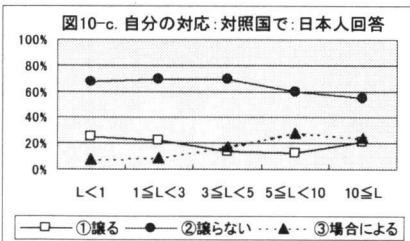
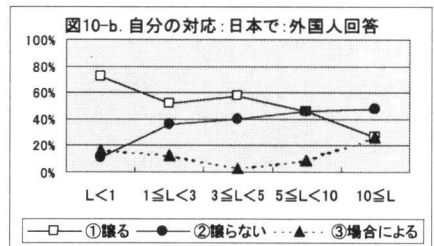
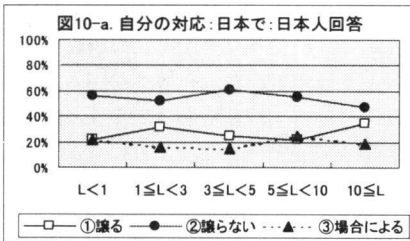
4.2.5 対照国の人の態度予測

ビデオ場面のような状況が対照国で対照国の人同士の間で起こったときに、割り込まれた人はビデオ場面のように譲るかどうか、という質問についての回答は、日本人・外国人ともに「譲る」より「譲らない」という回答が多数である(図9-a、b)。外国人回答は①と②の差がどの層でも20～30%程度で、「場合による」が滞在1年未満に多いことを除いて回答はほぼ一致している。日本人回答は「譲らない」の割合が滞在の浅い層ほど高く、長期になるほど低くなっている。



4.2.6 自分自身の対応<ビデオ視聴後>

自分だったらどうするか、ビデオ場面の状況における日本と対照国での自分の行動についての回答は、図10-a～dに示すとおりである。



外国人回答を見ると、日本での行動について、滞在年数が長いほど②「譲らない」の比率が高くなり、5年未満までの層では②より①「譲る」が多いが、滞在10年以上では①と②の回答比率が逆転している。滞在1年未満は対照国でも「譲る」が多い。一方、日本人回答は、日本と対照国とでの行動はどの層でも「譲る」が多数である。しかし、

対照国での自分の対応の回答を見ると、差は小さいが滞在年数が浅い層のほうが「譲らない」が多く、日本での外国人回答の「譲る」の割合と対照的な傾向が見受けられる。

5 考 察

「割り込む人」に関する回答では、特に滞在5年までの日本人回答に「割り込みが多く社会的にも必ずしもマイナスに評価されない」という日本と対照的な対照国像が非常に鮮明に現れているが、滞在が5年を過ぎると対照国も日本も同じように割り込みはマイナス評価されると受け止められ、割り込みの多さについても一概に対照国が多いとはいえないという意識になっていく。

「割り込まれた人」に関しては、対照国では言葉で抗議し、日本での対応は言葉ではなく表情や態度で示すという認識が全体にほぼ一致して見られる。「割り込まれて譲る人」については、外国人が非常に好意的に見ているのに対し、日本人は「遠慮しすぎ」というややマイナスの見方である。しかし、譲る人に対してややマイナスに見ていながら、滞在期間5年までの日本人は日本では譲る人はプラスに評価され、対照国ではマイナスに評価されると考えている。

このように見てくると、異文化社会の滞在が短いうちは出身国と現住国の違いをより強く意識しているが、滞在が5年を過ぎたあたりから出身国と現住国についての認識が近づいていく、という傾向があるように思われる。滞在5年までの日本人では、対照国の人は譲らないだろうと考えている人が圧倒的で、自分自身も日本でより対照国でのほうが譲らないという回答が多い。さらに日本人の5年以上の長期滞在層と外国人で、譲らないと回答した人の割合は日本も対照国もほぼ同じという結果であった。5年というあたりが一つの変化の節目のように見える。

自分自身の行動については、割り込みあるいは割り込まれたときの行動について、滞在3年以上5年未満の層が、どちらの国でも自分は出身国より現住国の人々の行動に近い行動をとると考えているように、この時期には出身国のやり方から離れ、現住国のやりかたにあわせて行動しているという意識が強くなる。さらに長期になるとどちらの国での行動もあまり差がなくなっていく。内海の文化習得モデルの段階はむしろもっと短いスパンでの変化を想定したもののようであるが(注5)、これらの回答に見られる長期的な異文化接触経験のプロセスの特徴は、内海モデルの各段階の特徴にあてはまるように思われる。1年未満の層はまだ接触経験自体が限られ、自文化の価値観で処理している時期(第1段階)であり、新しい社会での行動範囲や人間関係が広がる3年～5年の層にそれぞれの社会での言語行動の違いが最も強く意識されている(第2段階)。日本と対照国についての認識が近く、自分自身の行動もどちらの社会でも同じように意識している滞在10年以上の回答の特徴は、自文化と異文化と自己の3つを等距離に感じる、という第4段階と考えてよいのではないか。

自分自身の行動についての回答が、1年未満よりも1年～3年あるいは3年～5年の層で現住地寄りになる傾向が見えること、あるいは滞在の浅い層で、日本人より外国人のほうが現住地での自分の行動が現住地の人の行動に近い傾向にあるのは、社会的能力、例えば滞在地の言語を駆使して周囲の人と交渉や調整をし、社会システムを理解して情報を自在に入手し生活環境を整えるといった能力や言語能力も要因として考慮する必要があるかもしれない。現住地社会での言語行動の違いにはある程度初期の接触経験で気づくことができるが、摩擦を回避したり調整したりするための言語能力や社会的知識を身に付けるには時間がかかる。割り込まれた場合に言葉で抗議するというのも、割り込むことも、うまくやるにはそれなりの言語力が必要になる。外国人が日本でじつと順番を待つ、割り込まれても言葉による抗議はしないというのは、日本的やり方に従っているとも考えられるが、言葉の力が不十分な時期の戦略とも考えられる。

6 おわりに

滞在期間によって、出身国と現住国の社会における言語行動およびその規範についての認識が変化し、出身国・滞在国の社会に対する意識や自分の行動についての考えも、1年、3年、5年、10年といったあたりを節目として変わっていく様子が見られた。もちろん、変化の速度や過程には年齢や職種、居住環境や言語能力等々多様な個別の要因が影響すると考えられる。今回は滞在年数のみでデータを見ていったが、異文化体験によって意識の変容が促進されるとすると、より多くの接触体験をもつことによってそれはさらに加速されるとも考えられる。滞在社会の人々との接触機会がどの程度あるかという視点での分析による検証が今後の課題である。

〈注〉

(注1) 「ビデオ刺激による言語行動意識調査」は、平成6年～10年度文部省科学研究費（創成的基礎研究費）「国際社会における日本語についての総合的研究」（研究代表者 水谷修）の研究班2「言語事象を中心とした我が国を取り巻く文化摩擦の研究」（代表 平野健一郎）の国語研究所チーム（リーダー：西原鈴子、他8名）によって実施したものである。

(注2) 調査は1回につき約2時間、被調査者1～3人一組で実施した。調査は全体で6つの言語行動場面で構成され、1回の調査では平均2～3場面についての調査を行った。基本的には日本語による面接であるが、在日外国人調査では通訳を伴うこともあった。調査の詳細については、参考文献の西原ほか1999を参照されたい。

(注3) 海外経験のない東京出身東京在住の日本人を、異文化経験を持たない場合の言語行動規範意識の資料とすべく、被調査者として加えた。

(注4) 割り込み場面の被調査者442名中、依頼場面から続いて調査したものが411名

(割り込み場面の全被調査者の93%)、割り込み場面のみ調査したものは32名である。
 (注5) 内海(1990)では、文化習得モデルの参考にした Acton(1987)が文化適応に必要な期間を4ヶ月としていることに強く疑問を呈し、もっと長い可能性を考えているようであるが、そこでの内的社会距離の変化を見る実験は6ヶ月という枠を最長の枠組みで設定している。

〈参考文献〉

- Acton, William R. 1979 "Perception of Lexical Connotation: Professed Attitude and Socio-cultural Distance in second Language Learning." Unpublished doctoral dissertation, University of Michigan.
- Blum-Kulka, S., J. House, & G. Kasper(eds.) 1989 *Cross-cultural Pragmatics: Requests and Apologies*. Norwood, N.J.: Ablex.
- Brown, H. Douglas. 1980 "The Optimal Distance Model of Second Language Acquisition." *TESOL Quarterly* 14(2).
- 石井恵理子 1999 「場面5: 割り込み依頼と反応一順番に関する意識と言語行動一」『ビデオ刺激による言語行動意識調査報告書 分析編』(西原ほか)
- 内海由美子 1990 「日本語学習者の文化適応について」『日本語教育論集7』国立国語研究所センター
- 西原鈴子ほか 1994 『在日外国人と日本人との言語行動的接触における相互「誤解」のメカニズム』平成5年度科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書
- 西原鈴子ほか 1999 『ビデオ刺激による言語行動意識調査報告書 分析編』『同・資料編』文部省科学研究費(創成的基礎研究費)「国際社会における日本語についての総合的研究」(研究代表者 水谷修) 研究班2「言語事象を中心とした我が国を取り巻く文化摩擦の研究」国立国語研究所チーム報告書
- ネウストプニー, J. V. 1995 『新しい日本語教育のために』大修館書店